



都市医師会 だより

千歳医師会

小児救急医療フォーラムを開催

— 県立柏原病院のケースを学んで —

千歳医師会理事

北海道医報通信員

佐藤 貢

千歳医師会（尾谷透会長）主催の小児救急医療フォーラムが11月27日医療関係者、市長、市会議員、市民ら約100名の参加のもとANAクラウンプラザホテル千歳で開かれた。

兵庫県で地域住民が立ち上がり閉鎖の危機にあった県立病院小児科を救った事例についての基調講演などが行われた。

「基調講演」 兵庫県立柏原（かいばら）病院小児科のケースについて、丹波新聞記者の足立智和さんが発表。

2007年4月、丹波市、篠山市の地域（人口115,000人、うち18,000人が小児）から小児科医がいなくなるとの危機に直面した。1年前は小児科医7名であったが、諸事情により2名に減少し、そのうち1人は院長就任で実働は1名となり、この状況は産科の分娩にも支障が及ぶ恐れがあるということで市民は大きな衝撃を受けた。

このような状況で地元の新聞記者足立さんは、地域の小児医療の崩壊を記事に発表したことで、子育て中の母親達が立ち上がって「小児科を守る会」が発足した。この運動の中で“1人の母親の体験談”がみんなの気持ちを変えることとなった。

夜8時、ぜんそく発作の子どもを連れて夜間救急を受診。

既に30人ほどの子どもが順番を待っていた。

深夜2時、ようやく医師の診察を受ける。

明け方4時、入院が決まり病棟へ移動。

明るくなり目を覚ますと、ベッドサイドに「処置しておきました」と小児科医からの置手紙。その日も普段通りに診察をこなす医師を見たとき「先生、寝

てないんだ」ということに気がついた。

子どもの病気のことを考えたら小児科の先生がいなくなるなんて、ほんまに困るんや…でも先生のあんな姿見てたら「やめんといて」とは、よう言わん…。

寝不足で診療する医師達の過酷な勤務状況を理解した母親達は、医療が疲弊して崩壊していく要因には住民側にも責任があると考えた。医療崩壊や医師不足を行政に頼るだけでなく、自らが署名活動やフリーマーケットで活動資金を得て、医師が働きやすい地域を作るため3つのスローガンを掲げて活動した。

- 1) コンビニ受診を控えよう（軽症にもかかわらず重症者のための夜間二次救急施設を自己都合で受診すること）
- 2) かかりつけ医を持とう
- 3) お医者さんに感謝の気持ちを伝えよう

このような住民運動に当時の厚生労働大臣舛添氏が視察に訪れた。医師と住民は、医療を施す者と受ける者という相対する関係ではなく、共に力を合わせて地域の医療をつくるという新しいタイプの住民運動を高く評価した。

現在、柏原病院小児科は過去最高の5名に増え、地域の小児科センター病院として活躍しています。

「フォーラム」千歳市小児救急については、市民病院小児科医、消防の救急救命士、看護師、内科医、こどもサークル代表、市保健福祉部等それぞれの立場から現況について発表された。

現在、市民病院の3名の小児科医によって、平日は午後9時まで時間外診療を受け付けている。その後は一次内科救急を経て二次救急も受け持っている。

3名の小児科医によってこのような救急体制を維持していくことは大変な苦勞と考える。

今後の方針として、

- 1) パンフレットによる小児疾患の基礎知識の普及にさらに努力する
- 2) 電話コールサービス（24時間有効）の利用を高める
- 3) 患者側と医師側のお互いの思いやりが大切等が議論された

ひとり親家族の増加や経済的な厳しさの理由により時間外しか受診できない等の社会的な問題も今後の課題となった。

千歳医師会は、近隣の恵庭市医師会ともタイアップして広域救急医療の問題解決に努力しています。